

「最後の楽園」で森と関わる人々

増田初希*

世界からみたマダガスカル

「生物多様性ホットスポット」とは地球上にある非常に限られた面積のことを指し、他の地域ではみることのできない貴重な生物資源を含む場所の総称で、同時に人間活動により深刻な破壊が懸念されている場所でもある。生物多様性ホットスポットはマダガスカルを表象する時によく使われる言葉であり、同国特有の自然の価値を表している。マダガスカルは長い進化の過程でほとんどの生物分類において種レベルの固有率は90%を超えている [Goodman and Patterson 1997]。「地球最後の楽園」としてテレビ番組などで謳われているのを耳にした人は多いだろう。同国は深刻な貧困国でもあり、価値ある自然を保護するため1980年代から世界銀行など大規模なファンドがマダガスカルの自然を守るプロジェクトを継続的に実施している [Hannah *et al.* 1998]。

洗礼を受ける

筆者は幼少から動物に関心があり、いつかはアフリカで野生の動物を目にしたいと考えながら育った。マダガスカルへの渡航を決めたのも、エキゾチックな自然のイメージと固有種であるキツネザルに魅了されたからであ

る。憧れだった土地に初めて足を踏み入れた筆者はマダガスカルの洗礼をしっかりと受け、森林と人との膨大な関係の前に圧倒され戸惑いながら調査を進めていくこととなる。はじめにマダガスカルに降り立ったその日、空港で早速現金を盗まれることとなり、手配していた車も手違いのため来ず、なんとかホテルに着いた筆者は震えながら一夜を過ごした。犯罪率の高さは貧困と失業者の多さとも関係しているようで、首都を歩くと老若男女の物乞いや押し売りにもあった。これまで訪れた国とは全く異なるマダガスカルの様子を筆者は身をもって痛感した。

押し付けられたイメージ

2022年の9月30日に渡航し、約3ヶ月の滞在で感じたものは「エキゾチックで自然豊かなマダガスカル」というイメージはいわゆる西洋によるオリエンタリズムのような、外国のまなざしによって作られた表象であるということである。というのはマダガスカルの森林は1953年から2014年の間に44%が消失し、2005年以降も年間1.1%の森林が消失し続けている逼迫した状況にある [Vieilledent *et al.* 2018]。先行研究で知識として理解はしていても、実際にこの目で車窓から赤茶色

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

の地面や黄土色に濁りきった河川を眺めるまではその深刻さを身に染みて認識することはなかった。

マダガスカルに現存する森林のほとんどは保護区として囲われており、住民が容易に手の届くものではなくなっているのが現状である。森林の保護区化を促進したのは国際ファンドによるプロジェクトで、保護区化された森林は主に国外からの観光客を誘致するエコツーリズムの場となっている。我々が日本で見聞きしていたマダガスカルのイメージは海外によって作り出されたごく一部に過ぎないことを筆者は感じた。

アンダシベ村を訪れて

マダガスカルの人々と森林の関わりは完全に絶たれてしまったのかというところも言えない。筆者の調査地はマダガスカル東部に位置するアンダシベ村で、1970年に設立された国立公園と、住民によって管理されているコミュニティフォレストが存在している。この村ではフランス植民地化の鉄道建設のために木材の伐採と加工、採掘を基盤として発展してきた。現在ではエコツアーを産業の軸に構える動きがみられる。エコツアーのガイドとして働くガイドやコミュニティフォレストを運営する住民はアンダシベの森と関わることで生計を立てている。エコツアーガイドの主な仕事は観光客を見つけ、森の中を案内し動植物や森の風景を見せることだ。筆者がアンダシベでエコツアーに参加した時には同国で最大のキツネザルであるインドリ (*Indri indri*) や鮮やかな緑の体色が特徴的な

パーソンカメレオン (*Calumma parsonii*) を間近に観察することができた。実際に森の中を歩いて動植物を探すところも探検をしているような気分になれる。アンダシベで実施されている一般的なエコツアーの主なターゲットはインドリであり、あるガイドは「(アンダシベに来て) インドリを見ていないのはア



写真1 村に残される木材加工工場の跡、かつては村の主要産業でもあった



写真2 アンダシベの森で見かけた9kgもある最大のキツネザル・インドリ (左) とパーソンカメレオン (右)

ンダシベに来ていないことと一緒だ」と話した。

筆者はガイドに対して聞き取り調査を行うことで彼らのもつ価値観を理解しようと考えた。聞き取り調査は順風満帆とはゆかず、ガイドたちは筆者のことをマダガスカル語で外国人やよそ者を意味する「バザー」と呼び、なかなか心の内を話してもらえなかった。徐々にマダガスカル語を話すようになると相手の心のガードが溶けてゆくような感覚があった。また、面白いジョークも非常にウケが良かったがどちらもあまり精通していない筆者は苦戦を強いられた。そんな理由もあり、ガイドの溜まり場に顔を出したり、親切的なガイドの後をついてツアーに参加するところから調査を始めた。アンダシベ村のガイドは全員がフリーランスで、フランス語や英語を使い分けながら顧客を獲得している。周辺には管轄が異なるエコツーリズム用の森が複数あり、ガイドはその中から客待ちをする森を選ぶことができる。中でも客数の多い国立公園が人気で、朝からガイドの待機列に並んで客待ちをする。語学が堪能であったり、動物を見つけることが得意であるガイドは優遇され、ツアー会社から直々に仕事をもらうガイドもいる。エコツアーによる収入はガイドの能力により差があるようだ。

あるガイドは自身がエコツアーガイドを志したきっかけとして「ガイドは自分が得られる中で最良の選択肢だった。これ以外に仕事がない」と答えた。必ずしも多くのガイドが自然の価値を認識してガイド職を志したというわけではない。しかし多くの人がガイドと

して働くことで時には多くの収入を見込み、生計を立てることができる職であると認識しているようである。ある日に筆者が女性ガイドBの自宅を訪問し、食卓を囲んでいると彼女は自身の身の上を話し始めた。「(私の)旦那は数年間家を離れたことがあった。だけど私にはガイドの仕事でお金を得ることができたから娘2人を食べさせて、学校に通わせることもできた。…(今では)旦那は帰ってきたが、私はこの仕事をするのでいつでも自立することができるのだ。」

ガイドを職として生計を立てる人の中には「森(や動物)がいないと仕事として成り立たない」とし、自分たちの生計の場を守るため森の保護に価値を見出す人も多い。コミュニティフォレストを運営するガイドの中には実際に森林を守るためのプロジェクト活動を行なうものもいる。

アンダシベ地域の森の脅威のひとつとして、住民による焼畑が挙げられる [Dolch et al. 2015]。農民は焼畑を行なうほかに生業がなく、非持続的な焼畑を実践している。現



写真3 現地で世話になったガイド家族と食卓を囲む



写真4 焼畑の行なわれた山

地では乾季から雨季に切り替わる 12 月は焼畑のシーズンとされ、至る所から煙とともに焼けた匂いが漂ってきた。時にこの焼畑の火は保護林まで延焼することもあると現地のガイドは言う。コミュニティフォレストではこのような焼畑を実践する周辺の農村に向けて、焼畑を行なわなくても食物が生産できるようにマメなどの代替作物や、農業技術の提供を行なっている。プロジェクトを資金面で支えるのは外国のファンドだ。ここでは多様なファンドを誘致して破壊的な森の利用を食い止めようとする動きが垣間みえた。

マダガスカルでは海外の介入のもと自然保護が実施され、現地の人々と森林との間には隔たりがあるかのように思えた。しかし、アンダシベでのガイドの活動を見ていると導入された自然保護制度やエコツーリズムを利用することで現地の人々が徐々に、生活基盤のための森として自然の価値を見出している様子がうかがえた。海外から押し付けのように導入された「自然保護」という概念を現地の人々はエコツーリズムとの関わりの中で彼らな

りの価値を見出そうとしているのだろうと筆者は感じた。一方で森林そのものが人間活動によってすぐに消えてしまうといった脆弱な面も目の当たりにし、自然保護と現地の人々の生計との間で不安定なバランスを保ちながら活動がなされている様子をアンバランスに感じた。村人から国際団体まで幅広いステークホルダーの思いが交差するこの村で、ここに住まう人々がどの方向に向かっていくのか見届けたいと思うのである。

引用文献

- Dolch, R., J. Ndriamiary, T. Ratolojanahary, M. Randrianasolo and I. A. Ramanantenasoa. 2015. Improving Livelihoods, Training Paracologists, Enthraling Children: Earning Trust for Effective Community-based Biodiversity Conservation in Andasibe, Eastern Madagascar, *Madagascar Conservation and Development* 10(1): 21–28.
- Goodman, S. M. and B. D. Patterson. 1997. *Natural Change and Human Impact in Madagascar*. Washington, DC: Smithsonian Institution Press.
- Hannah, L., B. Rakotosamimanana, J. Ganzhorn, R. A. Mittermeier, S. Olivieri, L. Iyer, S. Rajaobelina, J. Hough, F. Andriamialisoa, I. Bowles and G. Tilkin. 1998. Participatory Planning, Scientific Priorities, and Landscape Conservation in Madagascar, *Environmental Conservation* 25(1): 30–36.
- Vieilledent, G., C. Grinand, F. A. Rakotomalala, R. Ranaivosoa, J.-R. Rakotoarijaona, T. F. Allnutt and F. Achard. 2018. Combining Global Tree Cover Loss Data with Historical National Forest Cover Maps to Look at Six Decades of Deforestation and Forest Fragmentation in Madagascar, *Biological Conservation* 222: 189–197.